

改 版 後 記

拙訳『ファウスト』の第一稿は、改造社版『ゲーテ全集』の第四巻及び第五巻として、昭和 12 年の夏から 14 年の春にかけて敢行したものである。私が敢えてこれを敢行と呼ぶのは、この難事を試みることは自分の力に余ることをよくよく承知しながら、改造社長山本実彦君の熱心な懇請を辞(ことわ)りかねて、遂にこの試訳に乗り出す気になったからである。私は当時私に備わっていた独逸語の力と日本語の力とを傾け尽くして『ファウスト』の鉄壁に突き当たって行った。そうして私自身と現有日本語との一つの限界に触れたような気持になるところまで行って遂に兜を脱いだ。

この初版は間もなく売れ尽きてしまったらしい。時として知人や学生から問い合わせられることがあっても、出版元が既に品切れで彼等の需(もと)めに応じ得ぬことを遺憾としながらも、『全集』の一部を重版することについては改造社としても複雑な考慮を要すべきことを慮って、その後数年は絶版のままに放置した。然るに昭和 16・7 年の頃に至って、当時の第一書房主長谷川巳之吉君が不図仙台の自宅にたづねて来て、拙訳『ファウスト』の豪華版を出したいという相談を持ちかけた。長谷川君が出版界を退隠する置き土産に、同君が本当に自分で満足し得るような贅沢本を残して置きたいのだそうである。私の希望は贅沢版よりは普及版の方にある。日本語でファウストを読みたい人々に出来るだけ親切な日本語ファウストを手渡して置くことこそ私にとって第一の誘惑であったが、長谷川君の立場から云えば、同君の特殊事情にふさわしい特殊出版にしたいのも無理はないと云わなければならぬ。順序は逆になるが豪華版の次に普及版を出すのも、絶版のままにして置くよりは世間の為になろう、こう考えて私は同君の申し出を承諾した。ただそういう贅沢本にするなら、自分の方でももう少し推敲したい部分があるから、それが出来るまで待ってくれと云って待って貰った。そうしてこの待たして置いた間に時潮の怒濤が打ち寄せて来て、この計画を押し流して行ったのである。訂正の原稿が出来たのは昭和 17 年の秋であった。長谷川君はそれを受け取って、同君の計画に適合するような印刷所や活字やを方々にさがし廻って、はては台湾にまで捜査の手を延ばしていたが、その間に急激の度を加え行く時局の転変が遂にこの計画の実行を不可能にしたのである。かくて豪華版の夢は消え失せてただ訂正の訳稿が私の手許に残存した。

ところが昨昭和 21 年の秋になって、拙訳の出版を希望する第三人目の人が現れた。それは文壽堂出版部の中井清太郎君である。当時清太郎君は私の未知の人であったが、同君と私との共通の心友、中井淳、高久田脩司の両君を介して、同君はその話を私の宅まで持ち込んで来たのである。同君の希望も、豪華版を最初にとのことであったが、この度は私がその順序を顛倒すべきことを申し出した。日本の現状、特にも用紙や印刷力や真摯なる読書階級の購買力の激減している状態にあって、豪華版を企てるのは申し訳がないと思う。日本に『ファウスト』を寄与すること、これを出来るだけ低廉に真正の希望者に頒(わ)かつこと----そのためならば、この欠乏せる用紙と印刷力とを使用することも許されるであろう。先ずこの義務を果たして置いて、その次に、事情が許すときに豪華版の贅沢を君と僕との間で計画したい。私はこう申し出した。そうして清太郎君は快くこの提議に従ってくれた。今準備が成って江湖に送り出すのは、正にこの普及版である。

然るに先日家人は『ファウストの豪華版の広告が出ていますね』と私に告げた。これは一見清太郎君の約束違反のように見えるが、普及版を豪華版にしたのは、清太郎君の意志の変更ではなくて、時勢の転変の随伴現象であることを承知しているので、私はただそれを笑ってきいていた。去年の秋には醜くない程度のさっぱりした普及版が、その後の更に甚だしき用紙の窮乏や印刷力の低下によって、実質をそのままに豪華版の位置に押し上げられたのである。私たちの次に計画していたのはこの程度のものではない。故に私は昭和 22 年初秋の豪華版を、昭和 21 年の、若しくは完全独立回復以後永久の、普及版と、安心して呼ぼうと思うのである。

改版の原稿は勿論昭和 17 年の訂正原稿である。今回印刷中に些細の訂正を加えた部分もあるが、それは固より云うに足りない。従って厳密に云えばこれは昭和 17 年版と名づくべきであるが、私の健康状態の故に、それを真正に昭和 21・2 年の再訂版となし得なかったことについては、偏に世間の宥恕を請わなければならない。その再訂が他日私自身によって行わるべきか、私の精神上の子孫によって行わるべきかは、ただ神のみぞしるしめすであろう。

『ファウスト』原文の解釈については、耳目の及ぶ限り、この戯曲の母国独逸の諸専門学者の研究について啓発を受けることを心掛けた。併しこのように微細に互って研究し尽くされている古典については、固より多くの異説異解論難があるのは当然である。自ら一つのファウスト解釈を得ようと志す者は、これ等の紛々たる異説の間に、自分自身の位置を定めて諸説を取捨選択しなければならぬ。それは我々のように東洋の生活慣習と歴史との間に育ち、東洋語を母語として来たものにとっては、困難な上にも困難な課題である。併しこの困難に辟易するような者が『ファウスト』の訳出を企図するのは固より甚だしき僭越である。故に私は自分の非力を忘れて、敢えてこの困難にぶつかって見ることを志した。私は諸註のうち、或る解釈を排斥して或る解釈に左祖し、相並んで可能に見える諸説のうち、作品全体の解釈の見地から、甲を採用して乙を捨てた。そうして稀には諸註の孰れにも満足せずに、新たに私見を主張することをも憚らなかった。此の訳に附載した「解説」と「註」とは、このような取捨選択主張の結果として成ったものである。従って訳文がこのような「文献学的準備」の上に築き上げられていることも亦勿論である。故にこの訳書は、先行する諸種の邦語訳のみならず、又訳者の『ファウスト』解釈を指導啓発してくれた内外の斯学の先輩に、悉く本質的な感謝を捧げる義務を負っているのである。就中多くのことを教えられたものとして、私は Erich Schmidt, Witkowski, Trendelenburg, Schröer, Petsch 等の名を挙げて置かなければならぬ。語句の註釈を離れた概観については Kuno Fischer, Th. Friedrich Vischer, Rickert, Minor, Burdach, Gundolf, Traumann 其の他の諸学者に、賛否孰れかの意味で多くの刺戟を受けた。特別に重要な点については時に学者の名を挙げてその説を批評しているところもあるが、大体典拠の列举を省略に附したのは、ただ繁を厭うが故である。諸家の註の照会と集成となしに訳書の註の大部分が成立し得なかったことは、改めて断るまでもないであろう。先進諸家に最大の恩恵を受けながら、取捨選択と去就の決に於いて自ら全責任を負いつつ、私は私の訳文と解説と註とを相互連関に於いて構成して来たのである。

ただ一つ遺憾なのは丁抹(デンマーク)のゲーテ学者 Sarauw(私は丁抹語で何と発音するかを知らない、今仮にサラウーと読んで置く)の論文をただ一つしか読み得なかったことである。私はペッチュ版の註にある引用によって此の人に注意し出した。そうして拙訳の初版が出版されて後久しく経ってから、始めて、"Zur Faustchronologie"というパンフレットを読んだ。それはただ 100 頁内外の片々たる小冊子ながら、私の疑問としていた二三の点について---例えば 1922-1927 の思想工場と織物の傑作との比較、1772 の "das Höchste und Tiefste" (至高最深)の意味などに---透徹した解釈を下していることを発見して、此の人を重んずる気になったのであった。併し東北帝大の図書館にはこの小論文以外に彼の著を見出すことが出来なかった。従って私は此の人の他の論文によっても教えられるところあるべきことを期待しつつ、今日までそれを果たすことが出来ずにいるのである。私はこの事を拙訳に於ける心残りの一つに数えている。

私は又拙訳に当たって眼に触れる限りの邦訳を参照した。恐らく此の書の最初の日本訳と称すべき高橋五郎氏の訳本は、不幸にして最後までこれを手にする機会を持ち得なかったが、その他のものは大抵それを披見して所々を参照して見る程度の注意をば払って来たつもりである。此れ等の諸訳の評価については、私見にそれぞれの差等があるが、今他人の成績を彼是論評すべき場合ではないであろう。私は此れ等の諸訳をとって自分の誤謬を発見し訂正するための反省資料に用いた。この意味に於いて私は又先行の諸訳に謝意を致さなければならぬ。併し単なる反省資料の域を超えて、私が拙訳の基礎となし模範となしたものは森鷗外先生の訳本である。若し先生の邦訳の先蹤がなかったなら

ば、私はこの程度の訳文をすら成し遂げることが出来なかったであろう。私は先生の訳を逃げることによってではなく、先生の訳を生かしてこれを補修することによって、自分の新訳の存在理由を築きあげようとした。従って先生の訳文の踏襲を嫌うよりも、寧ろ見解の相違につれて敢えて先生と離れる場合の勇気を自分の恃みとした。先輩の事業に十分の敬意を表しつつ、その上に身分相応の些少なる寄与を試みるのが、学問の伝統の連続と進展とに資する積極的貢献であることを私は信じているのである。従って私が鷗外訳『ファウスト』に感謝するところは特別に深厚である。私はこの謝意を実証するために、多くのうちの一例を此処に挙げて置こうと思う。それは第二部第一幕仮装舞踏会の場の一節(5762-3 句)である。この幕の末尾に近く妖気が既に舞台に漂って、混乱が一般的になろうとしているとき、現場整理の働きを遂げてくれたプルーツス・ファウストに、先触れの者が感謝する言葉の一節である。----

Du hast ein herrlich Werk vollbracht,

Wie dank' ich deiner klugen Macht!

(これは大した御成功でしたね。

巧みに圧を利かせて下すって誠に有難うございます)

この「圧を利かせる」という訳は、完全に森先生の訳文の踏襲である。私は逐字訳に近い色々の言葉を考えて見たが、森先生のこの意識以上に、原文の意味を尽くして而も熟した日本語になるような表現に想到することが出来なかった。故に私は、甘んじて、且つ喜んで、感謝しつつ先生の知識をそのままに頂戴したのである。

併し先輩が既に注目に値する業績を残した領域に於いて、再び新しき開拓の事業を試みむとする者は、固より彼自信の確乎たる目標と計画とを持たなければならぬ。それがなければ彼は先輩の事業の剽窃補綴者たるに過ぎないであろう。拙訳を試みるに当たって私は如何なる目標を自分の前に置いたか。私は曾て「外国語の修得」の意義について学生と語ったとき(拙著『学生と語る』参照)、自分の『ファウスト』訳の経験を回顧して、その方針とした三点をあげた。それは次のようなものである。----

1. 出来るだけ厳密に意味の再現を志すこと。その意味は、単に対象的概念的に厳密なだけではなく、その感情的陰影に於いても亦原文に忠実であるように心掛けること。
2. 原文の文章構成に従って訳文を構成し『ファウスト』の学術的な印本に於いては必ず附記せられている句数番号の順序を、精一杯変更せぬように努力すること。
3. 韻脚押韻などの欠を補うために、日本語そのものに時処に応じたる変化を作り、これによって原文の豊富を極むる気分の転調に追従するように、不可能の努力を試みること。

この方針が単語に縛られる逐語訳を超越して、一句の意味を尽くそうとする逐語訳に近づいて行くことは云うまでもない。それにしてもこの三つの目標が後のものほどむずかしく、第三ヶ条に到っては遂にその半ばも成功していないことは、原文と訳文とを比較して読む人には炳乎(へいこ)として隠すべくもない事実でなければならぬ。併し私の目標はこうであった、そうして私のあらゆる努力はこの目標に向かって集中された。他日日本が本当に日本語ファウストと呼ぶに価するものを産出するとき、その捨て石の一つにでもなることが出来れば、私の努力も亦ただの徒労ではなくなるであろう。私は此の如き将来に望みをかける。そうしてそれが出来上がるまでの穴填めに、幾年かの間日本語ファウスト代行の役目を果たし得むことを心の底から切望する。ファウストによって練り上げられることは、今日の世界に於けると等しく今日の日本に於いても、益々必要を加えつつあることを私は信ずるからである。(昭和 22 年 10 月 2 日)

補 記

旧版の凡例から次の三条を抜載して置く。

1. 解説(第一部)の第一節は、Kuno Fischer(クーノー・フィッシャー)、Petsch(ペツチュ)、Witkowski(ヴィトコフスキー)等に負うところが極めて多い。レッシングのファウスト断片とこれに関連するもの、ジムロックの人形劇ファウスト等二三のものを除いては、私はこれ等の夥しき材料に眼を通す機会がなかった。従って信用づくで以上の諸書に頼らざるを得なかった。特にシュピース版ファウストの梗概は殆どそのままにクーノー・フィッシャーの抄訳である。

2. 解説(第一部)の第二節は許される限り簡約に従った。もう少し詳しいものを求める人は、拙著『地獄の征服』中『ファウストとメフィスト』の第一節を参看していただきたい。あれは主としてヴィトコフスキーによって成立史の大体を読者に紹介するだけのものであるが、ゲーテの生活との連絡は此处よりももっと詳しく説かれている。

3. 希臘拉典等の古典語の発音は、現今の新研究に従うよりも寧ろゲーテ自身の発音に接近することを主眼とした。併し自分の慣用癖とあまりに遠ざかる場合には、新しき発音法に従う身勝手をも敢えてした---キルケ、キュクローペの類である。。語音の長短は大して拘泥しなかった。ゲーテ自身も同一名詞を Heléna と読ませたり Hélène と読ませたりしているのである。

阿部次郎訳

ファウスト

第一部

昭和 22 年 4 月 15 日 初版発行 国立書院 定価 150 円
発行者 佐藤繁次郎

ファウスト

第二部(上)

昭和 22 年 11 月 25 日 初版発行 国立書院 定価 180 円
発行者 佐藤繁次郎

ファウスト

第二部(下)

昭和 23 年 2 月 15 日 初版発行 国立書院 定価 150 円
発行者 佐藤繁次郎

PDF-File の『数字番号』について

第一部

- (1) 解説 1. ファウストの伝説及び文学
2. 『ファウスト』第一部

＜献ぐる詞＞ ＜舞台上の前戯＞ ＜天井の序曲＞
悲劇 第一部 ＜夜＞

- (2) ＜廊門の前＞ ＜書斎＞ ＜書斎 2＞
＜ライブチッヒなるアウエルバッハの酒場＞

- (3) ＜魔女の厨＞ ＜街＞ ＜夕＞ ＜散歩道＞ ＜隣女の家＞ ＜街＞
＜庭＞ ＜園亭＞ ＜森と洞＞ ＜グレーチヒェンの部屋＞ ＜マルテの庭＞

- (4) ＜泉のほとり＞ ＜廊壁に沿える巷＞ ＜夜＞ ＜寺院＞
＜ヴァルプールギスの夜＞ ＜ヴァルプールギスの夜の夢＞
＜曇れる日＞ ＜夜＞ ＜牢屋＞

第二部

- (5) 解説 1. 『第二部』の構造(上)
2. 『第二部』の構造(下)
- (6) ファウスト(第二部)上
第一幕 <風光明媚の地> <帝室の居城。王室の広間>
<宏大なる広間と数々の次の間、仮装舞踏会のために飾り立てられ、
磨き立てられたるもの>
- (7) <庭園> <暗闇の廊下> <燈火明るき数々の広間>
<騎士の広間>
- (8) 第二幕 <円天井高く、狭くるしきゴシック風の部屋>
<古典のヴァルプルギスの夜>
- (9) ファウスト(第二部)下
第三幕 <スパルタなるメネラスの宮殿の前> <砦の内庭>
<(アルカーディエン)>
- (10) 第四幕 <(高山)> <端山の上にて> <僭帝の天幕>
- (11) 第五幕 <打ち開けたる土地> <宮殿> <深夜> <真夜中>
<宮殿の大いなる前庭> <埋葬> <山峡、森、巖、荒涼の地>
- (12) 改版後記
補記
PDF-File の数字番号についての簡単な内容説明

ファイル化が済んだ最後に、**個人的感想等**をメモしておく。(2024-2-14)

- * 「句数番号」と「註」は省略した。
- * 『ファウスト』の「注釈書」は詳細なものが多数出版されているが、現在そこまで調べる時間が不足していることと、取りあえずファウストを通読することを目指したためである。
- * 阿部次郎のファウスト訳を選択し、ファイル化したことに特別の意味はない。
何時だったか、また何処の古本屋かも記憶にないが、将来読みたいと考えて購入しておいたものである。
- * 仮名使いや送り仮名の問題は適当に自分流で対処したので、随所に誤りがあると思われるが、ご容赦願いたい。
- * 漢字の使い方や未読の文字には大層勉強させられた。
幸いワープロソフト「一太郎」は非常に優秀で、インターネットでの検索を併せれば、ほぼすべて読みこなせたと思っている。
- * 本当のところ、『ファウスト』の大山定一訳か高橋義孝訳をファイルにしたいと前々から希望しているが、著作権の問題から不可能だと思われるし、その問題が消失するまで当方が生存していることもあり得ないだろう。